文化論集第38号
2011年3月

# ブナの木陰で
## ――『牧歌』Bucolica 管見　その２――

野　村　圭　介

## I

個人的な思い出から筆を起こすことをお許し願いたい。もう随分と昔のことであるが，近所の山好きの知人に誘われて，秩父の両神（りょうかみ）山に登ったことがある。五月の下旬，渓流に小鳥のさえずりが時折こだまする山道を登ること一時間余り，やがて中腹の明るい若葉の森にさしかかった。ブナの森だ。初夏のやわらかい日差しをいっぱい受けた萌黄の色が眼にしみるようだ。実に美しい。四囲のまぶしいブナの若葉のただ中にしばらくの間茫然と立ちつくしていたのだが，今思い出してもそのブナの森の新緑の美しさには胸のふるえを禁じ難い。一期一会のブナとの出会いといっても過言ではない。

生来の怠惰と気まぐれで，机の前に黙念と坐しているよりも，巷をさ迷うことの方が多かった長い青春時代。おかげで（戯れに「あはれあはれ飲み打つ買ふが一番の文学修業と思（も）ひてはげみき」）古典語すなわちラテン語，それにちょっぴりギリシャ語をかじり始めた時は，初めての老ひという四十をとっくに越えていた。無謀な企て，確かにそうであったし，今も依然としてそう思うが，自身にとってはいささか止むに止まれぬものがあったようだ。ヨーロッパの言語と文学を主なる興味の対象とし，また曲りなりにもフランス語を教授し

て糊口をしのぎながら，何か自信に欠けた心やましい気持が常にあった。根無し草。人生根帯無く，飄として陌上の塵のごとし（陶淵明）。君子は本を努むと『論語』第一学而にもあるが，ヨーロッパの基といえばもちろん古代ギリシャ・ローマ。それにキリスト教（周知のように新約聖書の原文はギリシャ語）。日は暮れなんとして道遠しの感は深かったのであるが，その念はより一段と今切実なのであるが，とにもかくにも一歩を踏み出した。遅々たる歩行を続けながら，やがて一人の詩人と，一人の哲学者，というより（すくなくとも私によっては）文学者に出会った。ウェルギリウスとプラトンである。世にもまれなるマントヴァの高貴な魂と，かくも豊かな言語が他にあろうかとキケロを嘆息せしめたプラトン。爾来，大部な辞書や文法書，和仏英独伊等多くの翻訳書をつみ上げ，この両者を，ゆるゆるとくり返し味読することが，最大の喜びとも苦労ともなった。

プラトンはさておきウェルギリウス。『オデュッセイア』は翻訳でも楽しめるが，『アエネーイス』ではそれは無理。伊，仏，西等ロマンス諸語の訳でもだめだ。ダンテも同様不可能である（この点でシェークスピアは反対の例），この二人の偉大な詩人の場合，内容と形式がより一段と内的な流儀で融合している[(1)]。こんな風に言いながらラテン語学習へと我々をいざなうのは，二十世紀最大のロマニスト，Ernst Robert Curtius クルチウスであるが，彼はまた大著『ヨーロッパとラテン中世』の中で次の様に述べている。前稿でも触れた個所だが話のいきがかり上改めて引用したい。

「ローマ帝政時代からゲーテの時代にいたるまで，すべてのラテン的教養は『牧歌』第一歌を読むことで始まった。このささやかな詩をそらんじていない者（dieses kleine Gedicht nicht im Kopf hat をこう訳すのは少々訳しすぎと思われるが，ちなみに仏訳は qui n’a pas présent à l’esprit ce petit poème）には，ヨーロッパの文学的伝統への一つの鍵が欠けているといっても過言ではない」[(2)]と言い“Bucolica（Eglogae）”『牧歌』第一歌冒頭を引用している。

Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi
silvestrem tenui musam meditaris avena:
nos patriae finis et dulcia linquimus arva,
nos patriam fugimus: tu, Tityre, lentus in umbra
formosam resonare doces Amaryllida silvas.（1，1〜5）
ティテュルス，君は枝を広げたブナの木陰に身を横たえ
か細い葦笛で森の調べを奏(かな)でているんだね。
ぼくらは故里にいとしい田園に別れを告げる。
ぼくらは故郷(くに)を追われる。ティテュルス，君は木陰に憩い
森に教えている「美しいアマリュリス」と木魂を響かせるように[(3)]。

語順を自由に変換することのできるラテン語の詩行にあっては，行頭の語が当然ながら最も目にたつ特権的な位置を占め，つづく第二の重要な位置を行末の語が占めることになる。つまり頭と尻尾が肝要。まして上記劈頭の Tityre と行の末尾 fagi は，単に第一歌のみならず『牧歌』全十篇の第一行目の首尾であるだけにそのになう意味は甚大と言えるだろう。『牧歌』の後ほぼ十年をへて紀元前29年頃公刊された，四巻計2188行“Georgica”『農耕詩』の最終行で詩人は自身の『牧歌』第一歌一行目をほぼそっくりそのまま引き，この一行をもって『牧歌』全てを代表させている。尚パルテノペとは現在のナポリのこと。

illo Vergilium me tempore dulcis alebat
Parthenope studiis florentem ignobilis oti,
carmina qui lusi pastorum audaxque inventa,
Tityre, te patulae cecini sub tegmine fagi.（Ⅳ，563〜566）

その頃私ウェルギリウスは優しいパルテノペの地に
養われつつ，暇にまかせて取るに足らぬ詩作にふけり
若さに逸(はや)って，無謀にも牧人の歌とたわむれ
ティチュルスよ，枝を拡げたブナの木陰に，とお前を歌った。

ティテュルスという名前，ウェルギリウスのこの名への並々ならぬ愛着に関しては既に以前言及したが，尚一つ。Ovidius オウィディウスが“Amores”『愛の詩集』第一巻第十五篇で，

Tityrus et fruges Aeneiaque arma legentur,
Roma triumphati dum caput orbis erit.
ティテュルスと穀物とアエネーアスの戦(いくさ)は読みつがれることであろう，
ローマがその征服した世界の首都である限りは。

と，Tityrus でもって『牧歌』を，fruges で『農耕詩』，Aeneia arma で『アエネーイス』をそれぞれ言い換えていることに注目したい。

## Ⅱ

さて fagus，ティテュルスのブナ，本稿は『牧歌』のブナをめぐっての変奏曲の如きものとなろう。この詩集のフロラ，植物相は実に豊かなものがあるが，『牧歌』はまた「森の歌」とも称することができるだろう。もっとも森といっても，これは隙間もなく樹木の立並んだ暗いものではなく，あちこちに広い空地や牧草地があり，小川が流れ泉のわく明るい森である。silva 森という語は，その形容詞 silvestris の３回を含め実に24度も詩集に登場する。さらには同義の nemus が８度，林間の空地 saltus が３度。いくつか例をあげれば，

Sicelides Musae, paulo maiora canamus !
non omnis arbusta iuvant humilesque myricae;
si canimus silvas, silvae sint consule dignae.（4，1〜3）
シキリアの女神（ムーサ）たちよ，いささか偉大なることを歌おう。
ささやかな木立や丈低いタマリスクが皆に好まれるわけではない。
もし森を歌うなら，森は執政官にふさわしくあれ。

myrica は laurus 月桂樹などと共にアポロンの聖木，和名はギョリュウというらしいが，仰々しい語のひびきを敬遠してタマリスクとした。tamarisk（英），tamaris（仏）。

Daphnis ego in silvis, hinc usque ad sidera notus,
formosi pecoris custos, formosior ipse.（5，43〜44）
我こそは森のダプニス，その名はこの地より星々に届き，
美（うる）わしき羊たちよりもなお美（うつく）しき我は羊飼い。

ダプニスはヘルメスとニンフの間に生まれたシチリア島の美しい羊飼い。牧歌の創始者とされている。

Prima Syracosio dignata est ludere versu
nostra neque erubuit silvas habitare Thalia.（6，1〜２）
私の女神タリアは最初にシラクーサ風の詩（うた）とたわむれ，
森に住むのを恥じて顔を赤らめることもなかった。

タリアは文芸のムーサの一人で主として喜劇を司る。シラクーサ風の詩とは，ウェルギリウスが範としたテオクリトス風の牧歌のこと。

hic gelidi fontes, hic mollia prata, Lycori,
hic nemus: hic ipso tecum consumerer aevo.（10，42～43）
ここにはリュコリス，冷たい泉が，ここには柔かい草原が
ここには森がある。ここでお前と共に老いを迎えることもできよう。

リュコリスとは，ウェルギリウスの親友でまた高名な詩人でもあったGallus ガルスの許を去った恋人の名前である。

第一歌一行目のブナを嚆矢として，『牧歌』全十篇には様々の樹木が立ち返り現われるが，その頻度数の多いものをいくつか見てみたい。ちなみにfagus は六回。まず何といっても最も多いものはブドウ。vitis ブドウ９，vinea ブドウ園１，uva ブドウの房４，labrusca 野ブドウ１，pampineus（pampinus ブドウの枝葉，の形容詞）１，合計16回にもなる。さらに第三歌の arbustum もブドウ園のことだろう。

vitis ut arboribus decori est, ut vitibus uvae,
ut gregibus tauri, segetes ut pinguibus arvis:
tu decus omne tuis.（5，32～34）
ブドウが木々の，その房がブドウの
雄牛が群の，収穫が肥沃な土地の誉れであるように，
あなたは仲間の栄誉の全て。

あなたとはダプニス。

insere nunc, Meliboee, piros, pone ordine vites.

ite meae felix quondam pecus, ite capellae.（1，73〜74）
さあ梨を接(つ)げ，メリボエウス，まっすぐにブドウを植えよ。
山羊たちよ，さあ行け，かっては幸せだったわが群よ。

幸せなティテュルスとは反対に，土地を奪われた第一歌のメリボエウスは，泣く泣く故郷を後にするのだ。

ブドウについで多いのが月桂樹。これは音楽や詩の神，学問・技芸を司るムーサたちの神であり，同時に牧畜の神でもあるアポロン（別名，光明神 Phoebus ポエブス）の聖木である。laurus７，laurea２の計９度。

Et me Phoebus amat; Phoebo sua semper apud me
munera sunt, lauri et suave rubens hyacinthus.（3，62〜63）
そして僕はポエブスのいとし子。傍らに僕はポエブスの
好きな贈物，月桂樹と薄紅(うすくれない)のヒアシンスを欠かしたことはない。

当然と言うべきか『牧歌』の神々の中で最も登場数が多いのが，輝ける神ポエブスの名でしばしば呼ばれるアポロン。アポロン６，ポエブス11の計17回。次位がアルカデイアの牧神 Pan パーンで８回。

ブドウ，月桂樹につづく第三位が松。pinus で６，形容詞 pinifer が１の計７度。松はほかならぬパーンの聖木でもある。

Maenalus argutumque nemus pinosque loquentis
semper habet; semper pastorum ille audit amores
Panaque, qui primus calamos non passus inertis.（8，22〜24）
マエナルスの山では森はいつも楽を奏で，松は言葉を交す。

山にはたえず羊飼いたちの恋の歌や，
初めて葦に音色をさずけたパーンの笛がこだましている。

マエナルスとはギリシャのペルポネソス半島内陸部のアルカディア地方の有名な山。パーンの聖なる山でもある。

ブナと同じく６度言及されるのが柳。salix で５度，salictum で１度 。

Lenta salix quantum pallenti cedit olivae,
puniceis humilis qrantum saliunca rosetis.（5，16～17）
しなやかな柳が薄緑のオリーヴに，
つましい鹿(か)の子草が深紅のバラ園に及ばぬように。

malum リンゴもまた６度に及ぶ。これはかのパリスの審判の黄金のリンゴで名高いように，愛と美の女神 Venus ウェヌスの聖なる果物。

Saepibus in nostris parvam te roscida mala
—dux ego vester eram—vidi cum matre legentem.
alter ab undecimo tum me iam acceperat annus;
iam fragilis poteram a terra contingere ramos.
ut vidi, ut perii.....（8，37～41）
我が家の垣根の中で私は初めて幼ないお前を見た。
露にぬれたリンゴをお前は母親と一緒に集めていた。
案内役は十二歳になったばかりの私，でも手を伸せば，
細い下枝(しずえ)に触れることができた。
一見見るなり，私の心は奪われた……

『牧歌』十篇の中でも，最も美しい印象的なシーンの一つだろう。リンゴ畑での幼い恋の目ざめは，「まだあげ初めし前髪の，林檎のもとに見えしとき，前にさしたる花櫛(はなぐし)の……」と，かの有名な藤村の「初恋」をおのずから我々の口の端(は)にのぼらせることだろう。

５度現れるのが quercus 樫と hedera 木蔦(きづた)，cornus ハシバミ。４度が ulmus ニレ，myrtus 天人花（ギンバイカ），myrica ギョリュウ（タマリスク）である。うち最高神 Jupitter（Zeus）ユピテル（ゼウス）の聖なる木である樫と，ブドウと共に Bacchus バックスの聖木であり，詩人の額を飾った木蔦について一例ずつあげておきたい。

hic viridis tenera praetexit harudine ripas
Mincius, eque sacra resonant examina quercu.（7，13～14）
ここはやわらかな葦がミンキウス川の緑の岸を縁取り，
聖なる樫の木からは蜜蜂の羽音がひびいてくる。

ミンキウス（現ミンチオ）とは詩人の故郷 Mantua マントゥア（現マントヴァ）の地をうるおす大河。ミンキウスは，三大詩集『牧歌』『農耕詩』『アエネーイス』でそれぞれ一回づつ言及される。一度のみ，しかしというかそれ故にというか，各々極めて印象的に。語の頻度数が必ずしもその重要性と比例しない好例であろう。ミンキウスにこめたウェルギリウスの懐郷の思いは切実なものがあるが，それは三度ともに詩行の劈頭を占めた川の名の特権的な位置からも明らかであろう。

propter aquam, tardis ingens ubi flexibus errat
Mincius et tenera praetexit harudine ripas（Georgica，Ⅲ，14～15）
広大なミンキウス川がゆっくりとうねりながら流れ，

岸辺をやわらかな葦で縁取っている水のほとりに。

tenera praetexit harudine ripas と，詩人は『農耕詩』でも上に引用した『牧歌』第七歌と全く同一の詩句をくり返す。『アエネーイス』では，

quos patre Benaco velatus harudine glauca
Mincius in festa ducebat in aequora pinu.（Aeneis，X，205～206）
彼等を，ベナークス湖を父とし，青灰色の葦におおわれた
ミンキウスは，敵意に燃える松林の船で海へ導いた。

さて木蔦（きづた）だが，詩人の庇護者 Gaius Asinus Pollio ポリオを讃えた第八歌から例を引きたい。

a te principium, tibi desinam. —accipe iussis
carmina coepta tuis, atque hanc sine tempora circum
inter victrices hederam tibi serpere lauros.（8，11～13）
あなたから始めた私は，あなたを讃えて終えよう。
あなたが命じて始めた詩をお受け取り下さい。そして勝利の月桂樹と共に，
あなたのこめかみのまわりにこの木蔦が這うのをお許し下さい。

木蔦といえば，ウェルギリウスの少し後輩の Horatius ホラチィウス，その有名な“Carmina”『歌章』の巻頭詩，詩作こそ我が天職と高らかに宣した詩が忘れ難い。

Me doctarum hederae praemia frontium
dis miscent superis, me gelidum nemus

Nympharumque leves cum Satyris chori
secerunt populo.....（Carmina I，1，29〜32）
我が学ある額を飾る木蔦は
我をば天空の神々と交わらせ，
涼しき森と軽やかに舞うニンフとサチュロスは
我を世俗よりへだてるであろう……[(4)]

このくだりを読むたびに，私は夕闇迫る森の水辺で，あかず踊るニンフとサチュロスたちを描いたClaude Lorrainクロード・ロランの名作を想い浮べる。上野の国立西洋美術館に常設展示されているので，一見をお進めしたい。

## Ⅲ

いささか脱線したようだが，そろそろfagusブナに戻らねばなるまい。『牧歌』に於けるブナの登場回数６は，ブドウや月桂樹，松等の少々後塵を拝するのだが，必ずしも頻度数が当該植物の有意義性というか重要性に比例するわけでもあるまい。もっとも６度というのは相当のものではあるが。まず特記すべきは，ブナはウェルギリウス固有のものであるということ，彼が範としたテオクリトスには一度も現われない。シチリア島の木ではなく，詩人の出身地北イタリアの風土と強く結びついた樹木なのだ。それに私には，fagusファグスという語のひびきが好もしい。あたたかく，くぐもったような音色が何ともいえず良い。日本語のブナという音もこれといく分共鳴するものがあるだろう。

さて改めて第一歌劈頭に注目したい。

Tityre, tu patulae recubans sub tegmine fagi
ティテュルス，君は枝を拡げたブナの木陰に身を横たえ

くり返すが，第一歌第一行は当然のことながら『牧歌』全十篇の第一行なのであり，その重要性は限りなく高いと言わねばなるまい。fagus はしかも行末の目に立つ位置にある。これ一つをもっても，詩人がこの語にこめた思いが伝わってくるようだ。ティテュルスは，lentus in umbra 木陰でのんびりと憩い，素朴な葦笛を森にひびかせながら恋人に思いをはせている。ささやかな，つましい情景とはいえ，これはいわゆる，美しく心地よい場所 locus amoenus ロクス・アモネヌスの一典型であろう。『ヨーロッパ文学とラテン中世』でクルテウスはこれを Lustort と独訳し，和訳は「悦楽境」となっているがどうだろうか，「快美境」位の方がいいと思うのだが。同書第十章理想的景観の第六節 Der Lustort にこのようにある。「*locus amoenus* はうるわしい，日陰のある寸景であって，その最小限の道具立ては一本（もしくは数本）の樹木，草地，泉もしくは小川である。これに鳥のさえずりと草花がつけ加えることもある。もっとも豊かな仕上げでは，さらに微風がつけ加わる」(5)。

ロクス・アモエヌスは，ブナの木陰を皮切りに，様々の形で『牧歌』十篇の中に登場する。それは例えば第三歌で，Damoetas ダモエタスと Menalcus メナルカスが歌合戦をする初夏の草原（くさはら）。審判役の Palaemon パラエモンは，

Dicite, quandoquidem in molli consedimus herba.
et nunc omnis ager, nunc omnis parturit arbos,
nunc frondent silvae, nunc formosissimus annus.（3，55～57）
歌いたまえ。我々は柔かい草の上に腰を下ろしたのだから。
今や野のすべてが，あらゆる木々が芽ぶき始めた，
森はいま緑の葉でおおわれ，いまは最も美しい季節。

第五歌のメナルカス（第三歌では相手より年下であったのに，ここでは年長であるのが面白い）は，ハシバミ交りのニレの林に腰を下ろさないかと誘う。

対して Mopsus モプススは，

Tu maior; tibi me est aequum parere, Menalca,
sive sub incertas zephyris motantibus umbras,
sive antro potius succedimus. aspice, ut antrum
silvestris raris sparsit labrusca racemis.（5，4～7）
あなたのほうが年上だ，メナルカス，僕はあなたに従おう，
西風に揺れる木影の中でも，というよりどちらかといえば
洞穴（ほらあな）の中でも，ごらんほら，まばらな実をつけた
野ブドウにおおわれた洞穴を。

こまやかな神経の行も届いた，いかにもウェルギリウスらしい美しい一節だ。この洞穴は，そこをへてアルカディアならぬ桃源郷に至ったという，陶淵明の名高い詩文をいささか思わせないでもない。

第七歌の Corydon コリュドンと Thyrsis テュルシスの歌くらべの場は sub arguta ilice 風にさやぐウバメガシの木陰。その近くを，やわらかな葦の生えた岸辺をゆったりと川が流れ，樫の木からは蜜蜂の群が羽音をひびかせている。

また第九歌の劇中劇ならぬ，詩の中の詩では，海のニンフ Galatea ガラテアに呼びかけて，

huc ades, o Galatea; quis est nam ludus in undis?
hic ver, purpureum, varios hic flumina circum
fundit humus flores, hic candida populus antro
imminet, et lentae texunt umbracula vites:
huc ades; insani feriant sine litora fluctus.（9，39～42）

おいでここにガラテア。なぜ波間で戯れているの？
ここは目もあやな春，川辺には色とりどりの花が
咲き乱れ，洞穴の上には白いポプラがそびえ，
しなやかなブドウのつるがこまやかな影を織っている。
おいでここに。乱暴な波はむなしく岸を打っているがいい。

第一歌のティテュルスは，deus nobis haec otia fecit 神様がこのような閑暇をお恵み下さった，と言う。彼はブナの木陰でくつろぎながら，愛の調べを奏で，また第三，五，七歌では牧人たちがロクス・アモエヌスに集って，恋やまわりの自然や神々をモチーフに歌合戦をくり広げる。これがアルカディアだ。もちろん現実のペロポネソス半島の奥深い山岳地帯のそれではなく，Snell スネルのいう「羊飼いたちの国，恋と詩の国」(6)，ほかならぬウェルギリウスの発明に係わる牧歌的アルカディアである。この国の住民たちにとっては，牧畜の仕事よりも，雅(みや)びな遊戯のほうが大切なのだ。第七歌のメリボエウスは，Posthabui illorum mea seria ludo 遊びのために自分の仕事を後回しにした，と言う。この遊びとは歌くらべであるが。

amat bonus otia Daphnis.（5，61）
恵み深いダプニスは閑暇を愛する。

ダプニスは牧歌の創始者とされる，伝説の羊飼い。この otia は平和と訳してもよいだろう，満ち足りた大平の世界，時に甘い眠りを誘うような。

Tale tuum carmen nobis, divine poeta,
quale sopor fessis in gramine, quale per aestum
dulcis aquae saliente sitim restingere rivo.（5，45～47）

神のごとき詩人よ，君の歌はまるで草臥れ時の
草上のまどろみ，夏の喉の乾きをうるおす
ほとばしる甘やかな谷水のようだ。

このアルカディアでは，妙なる音楽や詩に，人のみならずニンフやサチュロスといった半神も，けものや樹木も，岩山さへ聞きほれたと伝えられる。第六歌の山野の精，酒神バックスの徒である老 Silenus シレヌスが歌い出すと，

…… simul incipit ipse.
tum vero in numerum Faunosqne ferasque videres
ludere, tum rigidas motare cacumina quercus;
nec tamen Phoebo gaudet Parnasia rupes,
……すぐに彼は歌い始めた。
その時ファウヌスやけものたちが拍子に合わせて踊り，
固い樫の木が梢を揺するのを眺めることも出来たであろう。
パルナッソスの岩山もこれほどまでにポエブスを喜ぶことはない。

ところで fagus だが，第五歌のモプススは，ブナの木の緑の樹皮に刻みつけた詩（in viridi nuper quae cortice fagi carmina descripsi 5，13〜14）を朗々と唱する。木に刻すといえば，第十歌のガルスがむしろ忘れ難いが。

Certum est in silvis inter spelaea ferarum
malle pati tenerisque meos incidere amores
arboribus: crescent illae, crescetis amores.（10，52〜54）
私は決めた，むしろ森のけものたちの巣穴の間で
苦しみ耐え，私の愛を柔かい木肌に刻みこもうと，

木は成長し，愛よ，お前も共に大きくなるだろう。

arbor 樹木とあるだけだが，あるいはこれもブナかもしれない。はるか昔思われ人の名を木に印(しる)した思い出を持つ向きもあるだろう。「少年の日は物に感ぜしや　われは波宜亭(はぎてい)の二階によりて　かなしき情歓の思ひにしづめり。……かのふるき待たれびとありやなしや。　いにしへの日には鉛筆もて　欄干(おばしま)にさへ記せし名なり。」（萩原朔太郎「郷土望景詩」）

つい筆がそれたが，亡きダプニスのためにブナの幹に刻んだ詩を歌うモプススに対し，メナルカスはしぼりたての乳で泡立つ二つの杯（pocula bina novo spumantia lacte. 5，67）をそなへ，宴(うたげ)を催す。

et multo in primis hilarans convivia Baccho,
ante focum, si frigus erit, si messis, in umbra
vina novum fundam calathis Ariunsia nectar.（5，69〜71）
何はさておき，あふれる程のブドウ酒で宴を賑やかにしよう，
寒さの折は暖炉の前で，刈り入れ時は木陰で，
新しい神酒(ネクタール)美酒アリウシアを杯から注ごう。

これらの杯（poculum, calathus）が何をもって作られていたのか明瞭ではないが，『牧歌』の杯といえば，何といってもブナの木でできた杯だ。ブナはその淡紅褐色の材が緻密で木目が細かく，また容易に加工できる故，器具や家具を作るのに適すると言う。第三歌，のっぴきならず歌を競っての一勝負と相なり，ダモエタスが牝牛を賭けように言うのに対し，メナルカスは，

…… pocula ponam

fagina, caelatum divini opus Alcimedontis,
lenta quibus torno facili superaddita vitis
diffusos hedera vestit pallente corymbos.（3，36〜38）
僕はブナの杯を賭けよう，神の如きアルキメドンが彫ったものだ。
巧みなノミで浮彫されたしなやかなブドウの枝葉が，
あちこちで青白い木蔦の房を覆っている。

しなやかなつるのブドウ葉に覆われた淡い木蔦の房，というのはいかにもウェルギリウス調の美しい詩句であるが，R.D.Williams はその著“The Eclogues & Georgics”の commentary で上記引用の最終行を an exact golden line[(7)]と評している。ウィリアムスがしばしば口にする golden line 黄金の詩行とは一体何か，当初はいぶかしく思ったものだが，つまりは一個の動詞を要（かなめ）にして名詞二つとそれを修飾する形容詞を各々一つ配したシンメトリックな詩行を指すようだ。

diffusos bedera *vestit* pallente corymbos
奪格
対格

なるほど語順の自由なラテン語の特性を存分に発揮した，均衡の取れた，いかにも端正優美な詩句である。golden line の例をいくつか補えば，

pacatumque reget patriis virtutibus orbem（4，17）
父祖伝来の徳で平和な世を統治するであろう。

et foliis lentas intexre mollibus hastas（5，31）

そしてしなやかな杖に柔らかい葉を巻きつけることを

メナルカスの，上部にバックスゆかりのブドウと木蔦を，中央に天文学者Conon コノンと他に一人を彫ったブナの杯に対し，ダモエヌスも同じアルキメドンの手になる杯を持っていると言う。ブナ材のとは明記していないが，おそらくそうに違いない。

Et nobis idem Alcimedon duo pocula facit,
et molli circum est ansas amplexus acantho,
Orpheaque in medio posuit silvasque sequentis.（3，44～46）
アルキメドンなら僕にも二つ杯を作ってくれた
取っ手のまわりに，柔かなアカンサスの葉，
中央にはオルペウスと彼に従う森。

オルペウスとはいうまでもなくギリシャの伝説の中で，最も名高い音楽家でありかつ詩人でもある。堅琴をかきなでながら歌うその歌声には，鳥獣（とりけもの）はもちろん，山川草木までもが聞き惚れ，楽の音に喜々として身をふるわせたと言う。

## Ⅳ

牧歌的アルカディアの世界と強く結ばれた fagus の三例を見てきたが，ウェルギリウスのブナはこうした pro Arcadia のみならず，これとは逆の anti Arcadia の象徴ともなりうる。自然や神々と相調和した平和な世界の崩壊を暗示するような fagus もまた三例を数えるのである。

Formosum pastor Corydon ardebat Alexim,
delicias domini; nec quid speraret habebat.

tantum inter densas umbrosa cacumina fagos
adsidue veniebat, ibi haec incondita solus
montibus et silvis studio iactabat inani:（2，1～５）
美しいアレクシスに，羊飼いコリュドンは無我夢中だった。
とはいえ相手はご主人のお気に入り，一縷の望みとてなかった。
しげしげと，鬱蒼と空を覆ったブナの茂みに足を運び，
ぽつねんと山と森に向い，甲斐なくも思いをこめて，
らちもなく声をはり上げるのであった。

第二歌冒頭。一行目は黄金の詩行のこれも一例であろう。さらにｏとａのassonance 母音の反復が心地良い。ブナの鬱蒼と空を覆った茂みは，コリュドンの暗い情熱を暗示する。山々に向って声を上げる彼のむなしい熱情は「つれもなき人を恋ふとて山びこのこたへするまで嘆きつるかな」（新古今集521）を思わせる。灼熱の太陽のもと，つれないアレクシスを求めて，セミのしわがれ声を頭上より浴びながら，彼はさ迷い歩く。コリュドンは嘆く，「正気を失った僕は花園に熱風を澄んだ泉に猪を送りこんだ」floribus austrum perditus et liquidis immisi fontibus apros（2，58～59）と。花園や泉の平和な世界を乱すpassion，これはアルカディアの森や野にやさしい笛の音と共に奏でられる恋の歌ではない。スネルは言う，アルカディアに於いては「一切は感情のほのかな輝きのうちにある。そしてこの感情そのものは荒々しくも，情熱的でもない。ことに恋は感傷的な憧憬 Sehnsucht である。」(8)

me tamen urit amor: quis enim modus adsit amori?
a Coryon Corydon, quae te dementia cepit !（2，68～69）
でも恋の炎は僕の身を焦がす。いったい愛にはどんな限度がある？
ああコリュドン，コリュドン，なんという狂気にお前はとりつかれたのか。

この狂気云々は，第六歌で再びそっくりそのままくり返される。

a virgo inflex, quae te dementia cepit !（6，47）
ああ，不仕合せな乙女よ，なんという狂気にお前はとりつかれたのか。

乙女とあるのは，クレタ島のミノス王の妃 Pasiphae パシパエのことである。彼女は海神ポセイドンが王に贈った牡牛に欲情を抱き，交って怪物ミノタウロスを生んだ。

a virgo inflex, tu nunc in montibus erras:
ille latus niveum molli fultus hyacintho
ilice sub nigra pallentis ruminat herbas,（6，52～54）
ああ不仕合せな乙女よ，お前は今山々をさ迷っている。
そして牡牛は，雪のように白い脇腹を柔らかなヒアシンスの上に横たえ，
暗いウバメガシの下で淡い緑の草を反芻している。

雪のように白い脇腹とあるが，第二歌の美少年アレクシスもまた，なによりもその色白の美しい肌が一番のチャーム・ポイントである。『牧歌』全篇を通じ，ウェルギリウスの「白」への執着は注目に値すだろう。なおパシパエに関しては『アエネーイス』（Ⅵ，24～26）に「牡牛への酷薄な愛 crudelis amor tauri，ウェヌスの忌まわしい業 Veneris monumenta nefandae」とあるのも忘れ難い。

不幸な恋，むくわれぬ愛は『アエネーイス』第四巻の Dido ディドーを頂点として，詩人の生涯のテーマといって過言でなかろう。『牧歌』からさらに二例に簡単にふれておきたい。先にパシパエは牡牛を求めて山中をさ迷った

（erro）が，運命の女（ファムファタル） femme fatale を一目見るなり，心を奪われた第八歌のダモンは，

ut vidi, ut perii, ut me malus abstulit error !
お前を見るなり心は奪われた，ああ何という迷いが私を捕らえたことか。

この部分，仏訳の一つは運命という意の fatal を用いて訳している。すなわち Je te vis: je fus perdu; quel égaremert fatal m'emporta !(9)

不実な恋人を恨んでダモンは，Amor は残忍である saevus，邪悪である improvus と嘆くのだ。

Incipe Maenalios mecum, mea tibia, versus.
Nunc scio, quid sit Amor. duris in cotibus illum
aut Tmaros aut Rhodope aut extremi Garamantes
nec generis nostri puerum nec sanguinis edunt.（8，42〜45）
笛よ，私とともに奏でよ，マエナルスの歌を。
今こそ私は愛の神（プモル）が何であるかわかった。険しい岩の上で
トマロスやロトペの山があるいは地の果てのガラマンテス族が，
その子を生み落したのだ。我々と同じ種（しゅ）でもなく，同じ血を持つわけでもない，その子を。

マエナルスとは，牧神パーンの故郷アルカディアの有名な山であることは言うまでもなかろう。

『牧歌』の掉尾を飾る第十歌は，高名な恋愛詩人ガルスの苦しみに満ちた sollicitos 愛を歌った美しい詩篇である。すっかりやつれ果てたガルスを慰めるために，神々もまたやって来るのだが，アポロンは「お前のいとしいリュコリ

スは，雪を越え，恐ろしい軍営を抜けて別の男についていったよ」tua cara Lycoris perque rives alium perque horrida castra secuta est.（10，22〜23）パーンは「いつまで嘆くのだ。愛の神はそんな苦しみなど心にかけはしない。残酷なアモルは涙にあきることを知らない」ecquis erit modus? … Amor non talia curat, nec lacrimis crudelis Amor … saturantur（10，28〜30）

しかしガルスは，なおも彼のもとを去った恋人を想い，彼女を気遣かって歌う。何とこれは痛ましくも，せつなくも美しい詩句であることか。

Tu procul a patria, nec sit mihi credere tantum,
Alpinas a dura rives et frigora Rheni
me sine sola vides. a, te ne frigora laedant.
a, tibi ne teneras glacies secet aspera plantas.（10，46〜49）
お前は祖国から遠く離れて――どうしてこんなことが信じられようか，
私をおいてただ一人，ああつれない女よ，アルプスの雪と
凍りついたラインの流れを見つめている。寒気に体を傷めることのないように，
鋭い氷魂で柔かい足裏を傷つけることのないように。

リュコリスもまた典型的なファムファタルなのであろう。最後にガルスは，

omnia vincit Amor: et nos cedamus Amori.（10，69）
愛の神は全てを打ち負かす。アモルには膝を届するしかすべがない。

## V

牧歌的アルカディアのハーモニーを脅かすものは，限度を越えたパッションのみではない。第三歌でダモエタスは，君はこの「ブナの老木の傍らで」ad

veteres fagos（3，12）憤怒のあまり弓矢をへし折ったな，とメナルカスを非難する。ちらとここで姿を見せた，いささか不吉なニュアンスをおびた老いたブナは，はるか遠く第九歌のブナの木と見事に照応する。第一歌同様，退役兵のための理不尽な土地没収事件をモチーフとした第九歌，その不在の主人公メナルカス（またまたナナルカス）は，ほぼウェルギリウス自身だと想定される。彼の年老いた使用人 Moeris モエリスは，土地の新たな所有者のために山羊を届けように町へと向う。偶々出会った若い Lycidas リキュダスに，

O Lycida, vivi pervenimus, advena nostri,
quod numquam veriti sumus, ut possessor agelli
diceret 'haec mea sunt; veteres migrate coloni.'
nunc victi tristes, quoniam fors omnia versat,
hos illi — quod nec vertat bene — mittimus haedos.（9，2～6）
やあリキュダス，命長らえてまさか，こんな目に会うとは，
人の土地を奪いおって，こう言うんだよそ者が，
「ここは俺のもの，古百姓はとっとと出て行け」
運命は全てをもて遊ぶ，打ちのめされ，打ちひしがれて，
彼奴（きゃつ）のために—痛い目に会うがいい—子山羊を連れていくのさ。

平和な田園生活をいきなり，たちまちに破壊する，外的なつまりは政治的事象。若者は，ブナの木に言及しながら，

Certe equidem audieram, qua se subducere colles
incipiunt mollique iugum demittere clivo,
usque ad aquam et veteres iam fracta cacumina fagos
omnia carminibus vestrum servasse Meralcan.（9，7～10）

でも僕は耳にしたよ，丘が低くなり始める所から，
なだらかに傾斜して水際に至り，
いまではその頂(いただき)が砕けたブナの老木が立ち並ぶ所まで，
おたくのメナルクスは，すべてを歌のおかげで救ったと。

ゆるやかに傾いた丘と，ミンキウス川の静かな水辺と，てっぺんが砕かれた何本かの老いたブナの木。しみじみとした情感をたたえた印象的な情景。先に引用した，去った恋人を思いやるガルスのくだりもそうだが，こんな詩句を読むと，改めてウェルギリウスの深い心に，陰影に豊んだその詩句に感嘆する。長の歳月の風雨に耐えかねて，あるいは雷に打たれて，頂(いただき)が破壊されたのであろうか，veteres, iam fracta cacumina, fagos と，古い veteres とブナ fagos の間に，砕かれた頂が割って入った語順が素晴らしい。第二歌冒頭のブナも同様の語順，densas, umbrosa cacumina, fagos「鬱蒼と空を覆ったブナの茂み」。

有力者に詩作が認められて，メナルカスは難をまぬがれた？「なるほどそんなうわさもあった」Audieras et fama fuit. けれども，

..... sed carmina tantum
nostra valent, Lycida, tela inter Martia, quantum
Chaonias dicunt aquila veniente columbas.（9，11～13）
けれどリキュダス，わしらの歌なんて，戦(いくさ)の神様がお暴れのあいだは
鷲に襲われたカオニアの鳩ほどにも無力なものさ。

さて，神の如きウェルギリウス divin Virgile[10]と言うのは，二十世紀を代表するフランスの詩人，劇作家の Paul Claudel クローデル。生涯を通して彼は，この古代ローマの詩人をこよなく敬愛したが，上記第九歌のブナのくだりが余程心に残ったのか，「スペイン絵画」La peinture espagnole と題したエッセイ，

さらに『手帳』Cahier で二度，計三度この個所を引用している。うち二度が原文と微妙に異なるのは，彼が一々テキストに当らず，空(そら)で覚えていたためだろう。「スペイン絵画」の方は，

　　……　Qua se *subjicere* colles
　Incipiunt *et molli* jugum *dimittere* clivo,[11]

『手帳』Ⅷでは，

　　……　Qua se subducere colles
　Incipiunt *et molli* jugum demittere clivo,[12]

と引用したあと，私の部屋の窓から見える景色は全くこの描写とそっくりだ，大木の頂(いただき)はまるで鹿の枝角のように枯枝が立ち並んでいる，といった風にしるしている。

以上『牧歌』に登場する fagus の六例について，いささか（あるいは故意に）脱線気味に述べてきた。ウェルギリウスの発明に係わる，アルカディアの，またアンチアルカディアのいわば象徴的存在としてのブナが，いくらかは明らかになったであろうか。

　Populus Alcidae gratissima, vitis Iaccho,
　formosae myrtus Veneri, sua laurea Phoebo,
　Phyllis amat corylos; illas dum Phyllis amabit,
　nec myrtus vincet corylos nec laurea Phoebi.（7，61～64）
　ポプラはアルケウスの孫の，ブドウはイアックスの

天人花は美しいウェヌスの，月桂樹はポエブスの大のお気に入り。
ピュリスはハシバミが好きだ。ピュリスが好きである限り，
天人花もポエブスの月桂樹もハシバミに勝てないだろう。

とあるが，この最後の二行を，ウェギリウスはブナの木が好きだ，ウェルギリウスが好きである限り，天人花も月桂樹もブナには勝てないだろう，と言い換えてもあながち間違いではないであろう。

注(1) E.R. クルチウス『ヨーロッパ文学批評』松浦憲作他訳，P.16，紀伊国屋書店，1969年
(2) 同上『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一他訳，P.275，みすず書房，1971年
(3) 原文の引用は全て Tusculum 業書による。以下ウェルギリウスに関しては全て同じ，訳は拙訳。
(4) Horace, *Odes*, Les belles lettres, 2000，訳は拙訳。
(5) 『ヨーロッパ文学とラテン中世』P.281
(6) B. スネル『精神の発見』新井靖一訳，創文社，1974
(7) R,D.Williams, The Eclogues & Georgics, Bristol Classical Press, 1979, P.101
(8) B. スネル『精神の発見』P.504
(9) E. de Saint-Denis, Bucoliques, Les belles lettres, 1997
(10) Claudel, œuvres en prose, nrf, 1965, P.7
(11) Ibid, P.214
(12) Claudel, Journal II, nrf, 1969, P.239